

嗚呼朝鮮

嗚呼朝鮮

張赫宙

昭和二十七年五月三十一日 發行
昭和二十七年六月十四日 二刷

定價 貳百五拾圓
地方賣價 貳百六拾圓

著者 張 赫 宙

發行者 佐 藤 義 夫
東京都新宿區矢來町七一番地

發行所 株式會社 新 潮 社
東京都新宿區矢來町七一番地

電話九段(33)一一一一五番
振替東京八〇八番

鮮 朝 呼 鳴

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

二 光 印 刷
Printed in Japan

目次

第一部 ゴルゴタへの道……………五

第二部 避難民……………八七

第三部 絶望の彼方……………一六九

装
畫
宮
本
三
郎

鳴
呼
朝
鮮

第一
部
ゴ
ル
ゴ
タ
へ
の
道

六月二十五日。日曜日である。聖一はゆつくり寝てゐた。が、やがて、眼が覺めて、やつぱり夢だ
なと思つた。同じ辭書が本棚一ぱいにすらりとならんでゐるのを、少しも變だと思はないで見えてゐた
のは可笑しかつた。彼は起きて次の間の本棚の前に行つて見た。床板が黒く光つて、足がひんやりし
て心持よかつた。彼はつい二週間前に手に入れた三省堂のコンサイス英和と和英を取り出して、手で
撫でて、もどししながら、C・O・Dが揃へばもう望むところはないと思つた。そのならばには、赤い
表紙の井上辭書が二冊あつた。これは彼の叔父のお下りで、彼が徽文中學に入學した時、もらつたの
だ。解放直後で、書籍がどつと減り、辭書類は滅多に本屋に現れなかつた時のことだし、もらつた時
は非常に嬉しかつたが、來る秋、美國留學生に應募する今となつては、もつといい辭書が欲しかつた。
もしかすると今日あたり博文書館に入荷してゐるかも知れないし、昨土曜日の飛行便で間違ひなく
入ることを聞きつけてきたのは、從兄の永吉であつたから、從兄がもう出掛けたかも知れないと思ふ
と、いら／＼してきた。

彼は大急ぎで、支度をすると、外へ出た。母と妹は教會に出掛けてゐないし、下女の順伊が、縁側
で赤い表紙の本を讀んでゐた。

清涼里驛前のバス停留所でバスを待つた。が、市電は何臺も來て、眼の前で折返して市内へもどつ

て行くのに、いくら待つてもバスは来なかつた。「何か、どうも變だな」と思ひ、ふと見ると、ジープを先頭に装甲自動車が疾走してくる。バスも来た。が、兵隊が一ぱい詰めかけ、警笛を鳴らしながら走り去る。

「ね！ 何かあつたんですか？」

聖一は、驛の中からとび出してきて萬歳を叫んだ中年の男にきいた。

「何ですつて？」

その人は口髭を八の字にのばして、慶尚道訛りで「あんたの寝呆けた顔を見ると、天下は正に太平だとわかるけれども、人民傀儡軍が三八線を越えて南侵したといふのに、何かあつたんですかとは呆れたね」

と聖一に罵倒を浴せて、市電の方へかけて行つた。白リンネルの背廣のズボンが皺だらけになり、がに股に歩くその中年の男が非常に憎らしくなつて、あとを追つたが、彼はその男とは反對の運轉臺のはうにとりつき、押されながら中へ入つた。

「戦争になるのかな？ まさか」電車が動き出すと彼は考へた。市街は平穩であり、いつもと變りなく賑かな人出であつた。東大門からさき鐘路四街路あたりのきらびやかさつたらなく、シヨウウインドウにはマカオ物資が華やかに飾られ、最新輸入のペンベルグで仕立てた裳衣を自慢さうに歩いてゐる女のひとも、のんきさうである。その一人が英子であつた。「ミス・金」聖一が手をふるると、英子はふり向いて聖一を見つけ、につこり笑つた。すつとうしろに遠ざかつた英子から眼を放さないでゐる中に、停留所になつた。彼は英子の方へもどらうと思つた。

が、電車から下り立つたところで、従兄の永吉に呼びかけられた。あ！ やられたな、とその小わ

きに抱へた辭書を見た。金色燦然とした背文字にぐら／＼したら、

「弱つたな、聖一」と永吉は、廣い顔に憂愁を湛へた。

「從兄さん！ その辭書よくにゆづれよ」聖一が厚味のある本から眼を放さないでゐると、

「本どころぢやないよ。人民軍がやつてくれれば、俺達が何うなるか知つてゐるか？ おい、聞けよ」と斜向ひの和光百貨店の四階の窓に取り附けた擴聲器から、女の聲が流れてくる。

「國軍將兵の皆さまに申上げます。敵の先鋒は東豆川に迫りました。吾が前線將兵は寡兵よく戦つて居ります。けれども休日で後退した將兵の皆さまの應援を待つて居ります。只今即刻各自部隊にお急ぎ下さいませ。パスもククシーも總て皆さまをお乗せして、營門までお届け致します……」

と、廣小路のはうの歩道に、わつと人がたかり拍手がパチ／＼起り、群つた人が一齊に、萬歳を唱へた。はつと寄つて背延びしてみると、兵隊が一人タクシーをつかまへて、今しも乗りこむところであつた。兵隊は足さばきも勇ましくさつと車の中に入り、扉をしめ、萬歳を唱へる群衆の歡呼にこたへて、擧手の禮をした。聖一は緊張したが、あまりにも突然のことだし、戦争になつたやうな氣がしなかつた。やはり永吉が持つてゐる本が氣になつた。

「そんなに欲しければお前に上げよう」と永吉は惜しげもなく本をくれて、「お前はのんきだから、戦争のことが氣にならないだらうが、いざといふ時には、決然たる行動をとるんだよ」と云つた。

聖一ははつと眼を覺した。かけつばなしのラジオが喋り出した。

「我方國軍部隊ハコレヲ擊退シ、緊急適切ナ作戰ヲ展開中ナリ。東豆川方面ノ敵ハ戰車マデ出動サセタルモ、我方忠勇ナル國軍ハ猛烈ナ砲火ヲ浴セテ悉ク擊破セリ」

何だ大丈夫ぢやないか。聖一は枕元においた辭書をひきよせ、愛撫した。と、遠くで群衆のどよめきだし、鬨の聲とも洪水の音とも思はれる騒音が聞えてくる。聖一ははね起きて、寢卷のまま庭に出た。大門を開け路地から文理大の前まで駈けて出ると、暗がりには赤ん坊を負つた女や、牛の手綱をひいた百姓や、泣き叫ぶ子供やで、阿鼻叫喚である。中年の百姓をつかまへて、何うしたのかきいた。「話にも何もありません。國軍の兵士はどんく死んでしまひ、人民軍の戦車がすぐそこまで來てゐます」と答へて、慌しく市内へ向け落ち延びて行く。

聖一は開けつばなしにしておいた大門が氣になり、急いで家にもどつた。母も妹も、順伊も寝しづまつてゐる。自分の部屋に入ると、ラジオが景氣のよい聲で喚いてゐた。

「戦果發表、壘津地方ニ於テ、敵戦車七臺ヲ撃破、多發銃七二、小銃一三二、機關銃五、大砲一門ヲロウカクシ、敵一個大隊ヲ殲滅セリ」

安心々々、と聖一は尙聞える往來の騒音に向けて云つた。

「馬鹿百姓共、慌てるぢやない」

夜があけた。母が枕元に來て、心配さうに云つた。

「どうしたものでせうね、聖妃は避難したはうがいいと云ふんだけど」

ラジオがそれに答へた。

「吾ガ第六師團第七聯隊ハ、林富澤中領ノ勇英ナル指揮ニヨリ、敵侵攻部隊ヲ、春川外郭ニテ殲滅セリ。壘津方面ノ吾ガ部隊ハ逆ニ三八線ヲ突破シ、海州ニ突入セリ」

聖一は、「お母さん、大丈夫ですよ。戦争は始まつたばかりぢやありませんか」と云つた。

朝飯をすませて、驛前から市電で城東驛まで行き、歩いて、大學のある丘まで行つた。

學生達は昂奮して戦争の話で持ちきりであつた。

金義錫といふ學生が、「敵がもしソウルに迫れば、俺は斷然學徒兵を志願する。賛成の者は手を舉げろ」と喚びた。聖一は親友の金義錫のその一言が非常に嬉しくて、手を舉げた。と、その手をさつと拂ひ落して、「聖一、氣をつけろ。ああいふ奴こそ裏切るものだ」永吉であつた。そんな筈はないがと思つた。派手な背廣を着たがり、映畫を好み、大抵の時に喫茶店で過してゐる金義錫には、人を裏切る勇氣などある筈がないと考へた。

がや／＼云つてゐるところへ、英語の兪教授が入つてきた。瘦せて小柄な教授に、學生は一齊に戦争のことを質問した。

「今朝のムチオ駐韓美大使のラジオ放送に依ると、國連は必ず援韓することになり、前途は樂觀してよいと思ひます。しかし、敵が戦車を先頭に立て、三八線全部に互つて侵犯したことからして、永い間、戦争の準備をし、南侵に固い決意のあることがわかります。ところが、美國は對韓武器貸與すら出し澁り、韓國拋棄を聲明したりする。私は美國の矛盾だらけな政策が、北鮮をして戦争を決意させたと思ふし、萬一、不幸な事態になつた場合、美國は責任ある行動を取つてもらはねばならないと思ひます……」兪教授は話をしてゐる中に昂奮してきたが、學生が盛んに拍手したので、一寸話がとぎれた。聖一は感激して夢中で手を叩きながら、金義錫が「さうです。美軍は必ず出動して、赤色傀儡軍を木端微塵に叩きのめします。韓國軍萬歳！」と叫ぶのを見てゐた。

家に歸る途中、清涼里方面から行列のやうにつづいてやつてくる避難民に出あつた。ズボンまく

り上げ、脛に泥をつけ、田圃からそのまま逃げて来たといふ百姓が居たり、赤ん坊だと思つたのが大きな枕だつたと云つて泣く婦がゐたり、慌てふためにいた難民の姿は見つともよくなかつた。

清涼里驛に来ると、砲聲がよく聞えたが、聖一は希望的観測をして、國軍が反撃してゐるのだと解釋した。が、難民の中に、血だらけになり、縋帯にくるまつて、戦友にかつがれた兵隊が混つてゐたので、はつと思ひ、傍によつて、何うだつたときいた。と、兵隊は氣まり悪い思ひを覆ひかくさうとして、「カービン銃で重戦車が破れますか」と喰つてかかり、「戦車にとびつき下敷になつてめりく／＼と骨が碎ける戦友に見ならへつたつて、さうは行きませんよ。原始戦争ぢやないからね」と云ひのこして去つて行つた。

聖一は暗い氣持になつた。ひよつとすると負けるのかな、と考へながら、家にくると、

「お兄さん！ 牧師さんが見えて、避難するやうにすすめたのよ。あたし達何うするの？」と聖妃が鋭い眼で睨みつけた。きつい娘であつたが、今日は苛々して毒でも吐きさうだ。

「まあ、もう一寸様子を見よう。爺教授は大丈夫だと云はれたんだ。間もなく美軍がくるよ」

「ぢや、いいわ。もしものことがあつたら、お兄さんの責任よ」聖妃は怒つて母屋のはうへ行つた。

翌る朝、政府スポークスマンが、「政府は水原に遷つた」と發表した。だしぬけで、聖一はきよとんととして、ラジオの前に坐つてゐた。と、北鮮放送が入つてきた。金日成の聲であつた。

「ソウル市の解放は目睫に迫つてゐます。ソウル市民は勇英なる吾が人民軍を心から歓迎されるやう希望します……」

妹が縁側傳ひにかけてきて、「お兄さん、どうするの？ キリスト信者は皆んな惨殺されてよ」と叫

んだ。

聖一は、父が亡くなつてから半病人になつてゐる母をつれて避難することを考へて、うんざりした。が、何とかして水原まで落ち延びよう。そして再び、原州までいければ、外祖父が居る。田舎で靜かに英語の勉強でもして、ひと夏過す中には何とかなるだらうと思ふと、元氣が出てきた。

それで、往來に出て、タクシーを見つけたり、荷車をさがしたが、乗用車は軍が徴用して、偶に見つかつたタクシーには金持らしい家族が一ぱい乗つてゐた。清涼里驛も城東驛にも、難民が押しよせて、汽車を出せと喚いてゐるけれども、驛員自身既に逃亡したり、避難に夢中で、見向きもしなかつた。

聖一は仕方なく家にもどり、母と妹がまとめておいた荷をリュックサックに分けてつめて、とにかく京城驛まで行つてみようかと家を出た。大門で別れ際に、聖妃が、順伊に、

「あんたは使用人ですもの、人民軍が來たつて平氣よ」と云つた。順伊は、少し悲しさうに顔を歪めたが、すぐに諦めた。

その諦めた顔を見て、聖一は憐憫を感じた。順伊は江原道の農家の生れで、自作農の、かなり裕福な家に育つたが、小學校を卒へた年に、父が相場に手を出して失敗し自殺した。順伊の上にも下にも大ぜい兄妹がゐたので、順伊は下女奉公に出され、一二ヶ處勤めたが、虐待が酷いので、クリスチャンの家庭なら、といふので、聖一の家に來たのであつた。順伊は聖妃の本をそつと持ち出してよんで、聖妃に怒られたり、教會の夜學ではいつも一番の成績をとり、クリスマスには聖劇などに出演して、聖妃の嫉妬を買つた。

自分達だけ避難して、順伊一人に空家を守らせる。ぼつんと一人さびしく留守番をすのであらう順

伊の姿を描いて、聖一は不憫な氣がしてならなかつた。

「順伊！ さびしかつたら、ぼくの本棚から何でも好きな本を出して、よんでいいよ」と云つて、聖一は涙ぐんだ。

「はい！」順伊は顔を伏せた。聖妃と同じ年だが、ずつとからだが大きかつた。順伊は、主人のそのことばに却つて自分の身分を考へさせられて、泣けた。

その顔がいつまでも眼にちらついて困つたが、聖一は避難に心を奪はれて歩きつづけた。

漢江のほとりに辿りついた時には、もう陽が暮れてゐた。歩き慣れない母が途中いく度も休みたいたいと云ひ、東大門から鐘路を経て、西大門にくるまでに残りの半日を費したのである。そこから忠武路に出て、京城驛を左に望みながら、阿峴洞に來ると、縁日のやうな混雑で先きへ進むことが出來ない位難民が押し寄せてゐた。ころんで倒ればそれつきり、踏み殺されてしまひさう。殺氣立つた人中で、足に出來たまめを訴へる母を勵ましなが、歩くだけでやつとであつた。

宵闇に覆はれて、江岸は見通しがきかず、麻浦の渡場は、踏み込む隙もなく人間が詰めてゐた。もう一步も動きがとれず、人の波が前へ動くのを待つて少しづつ進むほかない。何處かで坐りたい、母がさう云つたが、立ち止つて脚を休めることも出來ない。

「ここではとても渡舟に乗ることは出來ないわ。いつそのこと鐵橋の下に行きませうか」と聖妃が云つた。

三人は少しもどり、路地を右へ抜けて、清岩洞に出た。江岸に下りたが、そこも人で埋り、休む場所もなかつた。